

(別紙2)

## 審査結果の要旨

氏名 小野寺拓也

本論文は、第二次世界大戦末期の国防軍兵士の野戦郵便を史料として、彼らは何を考えながら、なぜ最後まで戦い続けたのかを、彼らの主体性とイデオロギーという観点から考察したものである。

本論文の最大の強みと魅力は、大戦中に兵士と銃後の近親者との間でやりとりされた野戦郵便という未公刊史料にもとづいて大半の叙述がなされていることである。この史料群については、以前に使用歴のない膨大な数の郵便を利用して数量的に申し分なく、さらに、きちんとした史料批判をふまえ、明確な基準にもとづいて選択し、史料の長所・欠点を把握した上で使用している。

こうした貴重な史料を使用するにあたっては、どの角度から、どのように読むのか、という研究視角・方法が問われるが、本論文はこの点でも優れている。1、膨大なナチズム研究の流れを正確に把握した上で、「普通の人びと」のナチへの対応という90年代以来の論点を深化させる研究をし、2、ナチズム研究だけではなく、歴史学・思想史・社会学などに関する内外の幅広い知見に基づいて問題設定と史料分析を行い、3、日常史的手法によって兵士という行為主体の意識や行動を当時の構造や意味連関のなかで問い、4、幅広いフィールドをナチイデオロギーと捉えて、それが兵士の心情や行動に対して果たした機能を分析している。とくに4の考察方法は、他に類例のない著者独自の観点で、こうした方法によって、人種主義や反ユダヤ主義ではなく、さまざまなナチイデオロギーが、軍隊内、敵と遭遇する前線、さらに銃後との関係という兵士のおかれた状況のなかで「文化民族」であるドイツという集合主体と結びついていく過程、そのなかでヒトラー崇拜が重要性をもち、「ハード」に戦い続けられる様相などを浮かびあがらせることができた。

史料のなかから紡ぎだされてきた「被害者意識」が加害へとつながっていく、という被害と加害の重層性の指摘は、兵士が戦い続けた理由にせまる重要な結論であり、被害か、加害かという従来の二者択一的な問いでは明らかにできない複雑なナチズム体制のダイナミズムの解明に寄与し、ナチズム研究の今後の展開にも影響を及ぼす可能性を秘めている。

審査においては、残存史料の偏差への慎重さ、用語法に関する疑問、変化の把握の欠如、ナチの特性とは何か、といった疑問が提出された。しかし、そのなかには、野戦郵便という史料群からは解明不可能な、本論文の枠をこえる問題も含まれており、日常生活史研究や野戦郵便史料のもつ長所と同時に、その限界も浮き彫りになった。

本論文は未踏の膨大な未公刊史料の読破と分析、大量の文献読解に支えられた独創的な問題設定と史料に裏づけられた独自の結論などに鑑みて、ナチズム研究のあらたな境地を切りひらいた研究として評価できる。以上により、本審査委員会は一致して、本論文を博士(文学)の称号を授与するにふさわしい優れた成果として認めるものである。